

シューマンの歌曲

1851～52 年にかけて作曲された《6 つの歌》作品 107 には、ウルリヒ、ハイゼ、メーリケらの詩が並び、地味ながらも心に沁みる。第 1 曲「心の痛み」は、精神を病んだオフィーリアの歌に始まり、第 4 曲「糸を紡ぐ女」では、ピアノが奏する紡ぎ車のカラカラと回る音が、娘の孤独な心を表わしている。そして闇が静かに深まっていく「夕べの歌」で曲集を閉じる。この 2 年後の 1854 年、精神を病んだシューマンはライン川に身を投げることになる。

《ケルナーによる 12 の詩》は、リートが量産された「歌曲の年」(1840 年)の最後を飾る作品。ユスティヌス・ケルナーは知名度は低いですが、シューマンが創作初期に好んで作曲した詩人。詩の内容もヴァラエティに富んでおり、シューマンの心の明暗を映し出すかのようである。例えば、曲集中最も人気のある第 4 曲「新緑」では、春を迎えて鮮やかに萌え出る緑が描かれるが、その緑を美しく感じるのは、こちらに癒しがたい苦しみ (Leid) があるからだ、というシューマンならではの感傷が歌われている。

19 世紀ドイツの詩人グスタフ・プファリウスの詩に作曲した《3 つの詩》は 1851 年の作。演奏機会は少ないが、第 2 曲「戒め」の深い憂いに沈む旋律などは、強烈な印象を残す。

19 世紀ドイツ・ロマン派の詩人エマヌエル・ガイベルの詩に作曲した《ガイベルによる 3 つの詩》も「歌曲の年」の作。性格の異なる 3 人の若者をそれぞれに描き分ける。当時、シューマンはようやくクララを妻に迎え、幸せな時期にあったためか、楽想にも自然な発露が感じられる。

1850 年に作曲された《6 つの歌》作品 89 は、ほぼ無名の詩人ヴィルフリート・フォン・デア・ノイン(ヴィルヘルム・シュプフの筆名)の詩による。荒れ模様の夕べを描く不穏な響きの第 1 曲に始まり、第 3 曲・第 4 曲は秋の歌。第 5 曲にはめずらしく陰りのない快活さが姿を見せる。最後を飾る第 6 曲「ばらよ、ばらよ」は、伴奏のピアノが軽やかに絡む、曲集中でも異色の作。

作品 89 と同じ 1850 年に作曲された《リートと歌 第 4 集》は、文豪ゲーテの詩による第 1 曲「夜の歌」で幕を開ける。次第に深まっていく闇が訥々と心に迫る。第 2 曲は作者不詳の詩。春を待ちつづける松雪草の歌。第 3 曲はアウグスト・フォン・プラーテンの格調高い詩。最後の 2 曲はフォン・デア・ノインの詩で締めくくる。